

春告げ草・春告鳥

うぐいすの鳴き散らすらむ春の花
いつしか君と手折りがざさむ

(万葉集 卷十七・三九六六)

これは、大伴家持が「ウグイスが鳴いて散らしているであろう春の花を、早く君と共に手折り、頭にかざしたい」と春の訪れを詠んだ歌です。詠まれたのは、天平十九年の二月二十九日(新

暦の四月十七日)とされています。例年、国指定史跡下野国分寺跡では、三月上旬から四月下旬にかけてウグイスの鳴き声が聞かれますが、今年のウグイスはどうでしょうか? 「春告鳥」「報春鳥」と呼ばれるウグイスと冬の寒さ・厳しさに耐えて咲くことから「春告草」の異名を持つウメは万葉の昔から春の訪れを告げる歌に良く読まれています。

下野国分寺七重の塔跡の西側に一本の梅の古木があります。小さな古木のため、普段は目に留まりませんが、天平の丘公園周辺では、例年一番に開花する古木です。下野薬師寺跡にも約百本の梅の木を公園整備の際に植樹しましたが、これらの木よりも二〜三週間

早く開花します。実はこの古木が早く開花するわけは、この古木と隣り合わせにある常緑樹が古木を覆うように枝葉を伸ばしてくれているお蔭で、寒さが防いでいるからかもしれません。

「冬の寒さを耐える」この言葉にびつたりな遺物が、実は下野薬師寺跡や下野国分寺・尼寺跡から出土しています。「忍冬(にんどう)唐草文」や「均整(きんせい)唐草文」と呼ばれる唐草模様をデザインした軒瓦類です。白鳳時代や奈良時代に全国の寺院の瓦のデザインとして、この唐草文が流行ります。全国各地の役所や寺院の瓦のデザインは、簡単に述べると平城京など中央の役所や寺院と関係の深さで決まります。平城京で使用された瓦の木型と工人が各地に貸し出した瓦、国分寺などの建設に携わったと考えられています。下野薬師寺の最初の建物場合は、藤原京の川原寺(かわらでら)に使用された瓦の木型を借りています。その後、下野薬師寺が八世紀前半に「官寺」(国立寺院)に改修された際には、平城京右京三条三坊(現在の奈良市西大寺付近)に本籍をもつ従六位上(うゑのいみ)於伊美



下野市教育委員会 文化課

吉子首(きおびと)が、「下野薬師寺造司工(ぞうしこう)(工事の指導者)として派遣されています。下野薬師寺跡からは、「葡萄(ぶどう)唐草文」と呼ばれるデザインの瓦も出土しています。白鳳時代の葡萄唐草文様で有名な資料は、奈良の薬師寺に安置されている金銅製台座です。この台座には、ギリシャの葡萄唐草文、ペルシャの蓮華文様、インドの力神(ちからがみ)像、中国の四方四神(東に青龍(せいりゅう)、南に朱雀(すざく)、西に白虎(びやくこ)、北に玄武(げんぶ))がデザインされています。いわゆるシルクロード沿線のデザインの集大成です。このギリシャに起源を持つ葡萄唐草文様が、今から1300年前に下野薬師寺まで、もたらされたわけです。何とシルクロードの終着点とされる奈良からさらに先のこの下野市まで、ギリシャ起源のデザインが当時伝わってきたのです。当時、ギリシャでもまた、その沿線の都市でもブドウは、実が鈴なりに生り房(むら)となることから「豊穰(ほうじょう)・多産」のシンボルとして好まれていたようです。



国分寺鏡瓦